

# 『伊曾保物語』伝記部に見られる矛盾についての考察

濱田 幸子

## 【抄録】

一六世紀後半に来日した宣教師によって伝えられ、日本語に翻訳された「イソップ寓話集」にはローマ字口語体で書かれた『イソポのハブラス』と、国字文語体で書かれた『伊曾保物語』の二種がある。『イソポのハブラス』出版の目的は、外国人宣教師の日本語の稽古と、善き道を教えるための方便とすることで、天草学林で出版されている。一方『伊曾保物語』は一般に広く読まれたにもかかわらず、この書物が出版された目的も経緯も、出版に関わった人物も分かっていない。

『イソポのハブラス』にも『伊曾保物語』にもイソポの生涯を描いた伝記部が存在するが、それぞれに矛盾する箇所がいくつか見られる。しかし、その矛盾している箇所は『イソポのハブラス』と『伊曾保物語』で違い、矛盾点も異なっている。矛盾がもつ特徴やそれが生じた原因について考察することによって『伊曾保物語』成立に関わった人物についても考えていく。

キーワード…『伊曾保物語』、『イソポのハブラス』、矛盾、地理的知識

## はじめに

一六世紀後半、キリスト教布教・伝道を目的に来日した宣教師によって伝えられ、日本語に翻訳された「イソップ寓話集」には二種ある。一つはローマ字口語体で書かれた『イソポのハブラス』であり、いま一つは国字文語体で書かれた『伊曾保物語』である。<sup>(1)</sup>『イソポのハブラス』には、翻訳に関わった人物は書かれていないが、前書きである「読誦の人へ対して書す」が初めに置かれ、それには「……こまことに日本の言葉稽古のために便りとなるのみならず、善き道を入に教へかたる便りともなるべきものなり。」と書かれている。つまり、『イソポのハブラス』出版の目的は、外国人宣教師の日本語の稽古と、善き道を教えるための方便とすることであった。『イソポのハブラス』は一五九三（文禄二）年天草学林で出版されたが、江戸時代のキリスト教禁制のため、一般には流布せず、現在世界中に唯一冊、大英博物館に所蔵本があるのみで、その存在は、明治になって知られるようになった。

一方『伊曾保物語』は慶長・元和年間（一五九六～一六三三年）版から寛永十六（一六三九）年刊本まで九種の古活字本が出、その後一六五九（万治二）年には挿絵入り整版本も出て一般に広く普及した。しかしながら、『伊曾保物語』には、作者名も書かれておらず、前書きも後書きもなく、この書物が出版された目的も経緯も、出版に関わった人物も分かっていない。

『伊曾保物語』と『イソポのハブラス』のものととの翻訳原典は、先行研究によって一五世紀後半に出たシユタインヘーベル本『イソツプ』とされている。<sup>(2)</sup>

『イソポのハブラス』は「ハブラス」つまり寓話と題されている。あくまで寓話集であり、イソポの生涯の話（作者とされるイソポのことを書いた章で、実際には「イソポが生涯の物語略」「エヂツトよりの不審の條々」「イソポ養子に教訓の條々」「ネテナボ帝王イソポに御不審の條々」の四章からなっている。以後は伝記部と呼ぶ。）は寓話集の前に添えられたという体裁である。一方、『伊曾保物語』は『イソポのハブラス』と同じ原典から作られているが、『イソポのハブラス』とは違って、「伊曾保（イソポ）という人物の話」として作られ、人物の一代記物語という形で再構成されている。<sup>(3)</sup> 原典のシユタインヘーベル本ではイソツプの生涯の話ではなかった寓話も「伊曾保（イソポ）」の逸話として取り入れ、「伊曾保（イソポ）」の聡明さをさらに際立たせるように作り変えられている。形式も上巻中巻下巻と巻を分け、それぞれに章立てし、各章の題名をつける（上巻第一章本国の事、第二章荷もつをもつ事…）形に作り変えられている。『伊曾保物

語』の伝記部は上巻第一章から中巻第九章までで、中巻第十章から下巻の最終章までイソポが作った寓話である。

ところで、『イソポのハブラス』の伝記部にも『伊曾保物語』の伝記部にも矛盾する箇所がいくつか見られる。しかし、その矛盾している箇所は『イソポのハブラス』と『伊曾保物語』で違い、矛盾がもつ特徴やそれが生じる原因も『イソポのハブラス』と『伊曾保物語』とで異なる。

本稿では『イソポのハブラス』伝記部と『伊曾保物語』伝記部に見られる矛盾点に着目し、その特徴と原因について考察する。そして、そこから『伊曾保物語』の成立についても考察していく。

## 一 問題のありか

『イソポのハブラス』の伝記部にはいくつか矛盾する箇所がある。その矛盾は、話の展開につじつまの合わないところがあるのに、そのままにされているために生じている。言い換えれば、『イソポのハブラス』伝記部に見られる矛盾は、『イソポのハブラス』が未完成であるために生じているのである。

キリシタン宣教師が将来した『イソツプ寓話』の原典が初めて日本語に翻訳された際に、おそらく、冗長に感じられる部分は短くされたであろうし、キリスト教布教の一助としてイソツプ寓話を翻訳するという目的に照らすと、キリスト教以外の宗教における神々に関する話も排除されたであろう。「イソポが生涯の物語略」と題されているの

がそのあらわれである。元々はあつた話を、省いていった結果、つじつまの合わない部分が生じることになったと考えられる。<sup>(4)</sup>しかしながら、『イソポのハブラス』ではその矛盾を解消するための工夫はなされてない。理由は定かではないが、一つの理由としてこの矛盾を解消するだけの時間的余裕がなかったことは言えるのではないだろうか。ザビエルが鹿児島に来て、初めてキリスト教を伝えたのが一五四九（天文一八）年である。その後キリシタン宣教師がキリスト教を布教するために来日し、その際に携えてきた『イソップ寓話』を日本語に翻訳した。『イソポのハブラス』は、一五九三（文禄二）年天草学林で口語ローマ字体で出版されているが、その六年前の一五八七（天正一五）年には豊臣秀吉がキリスト教を禁止している。<sup>(5)</sup>『イソポのハブラス』は、制作にあたって、時間的にも、状況的にも余裕があつたとは考えにくいのである。

その点、『伊曾保物語』は、国字文語体であり、体裁も当時よく出された仮名草子であるため、キリシタンの書物であると咎められることもなかったであろう。出版も一五九六―一六二三（慶長・元和）年間で時間的に余裕もあり、部分的省略等による矛盾を解消するための手立てを施すこともできたと考えられる。実際に、『伊曾保物語』伝記部においては部分的に話を省略したために話の展開に矛盾が生じている箇所は見られない。

ところが、『伊曾保物語』伝記部には、話の展開上の矛盾とは異なる矛盾点が数箇所見られる。その矛盾の持つ特徴と、そのような矛盾が生じた原因がどこにあるのか考えてみたい。

『伊曾保物語』伝記部に見られる矛盾についての考察（濱田幸子）

次の第二章で『イソポのハブラス』伝記部に見られる話の展開上の矛盾点を取り上げて考察し、第三章では『伊曾保物語』伝記部に見られる矛盾点を取り上げて、その特徴を考察していく。

## 二 『イソポのハブラス』伝記部に見られる矛盾

『イソポのハブラス』伝記部に見られる話の展開上の矛盾点は次の通りである。

### （一）

まず、『イソポのハブラス』の「イソポが生涯の物語略」の中に、もともと吃音<sup>(6)</sup>であつたイソポが、主人の柿を食べたとの言いがかりに對して、吐却して吃音ながら身の潔白を証明した話がある。その後は、イソポが吃音であることは話の中に出でこないし、吃音が治つたということも出てこない。ところが、その後のイソポはすらすらと話をしており雄弁である。このことは話の展開上矛盾していると言わざるをえない。

これは、原典を日本語に翻訳した際に、はじめは口がきけなかつたイソポがイシスの神殿への巡礼に親切を尽くしたため、イシスの女神に口がきけるようにしてもらつたという原典にある話を省いて、イソポは話せるが吃音であつたとしているためである。この「口がきけなかつたイソポが口がきけるようになった話」はシュタインヘーベル本『イソップ』の英訳本の日本語訳本でも確認することができる。<sup>(7)</sup><sup>(8)</sup>

しかしこの点は、『伊曾保物語』では初めからイソポは「もの云ことおもしろげなり」と書かれており、イソポは話が面白く、雄弁であるので、話の展開に矛盾はない。おそらく原典を日本語に翻訳して初めに作られた「祖本」<sup>(9)</sup>では、イソポは、口はきけるが、吃音であったとしていたのだろう。それを、『伊曾保物語』作者が話の展開上の矛盾を解消するために、「吃音」ではなく「もの云ことおもしろげなり」と興味深い話をおもしろくするという形にしたのだと思われる。

(2)

次に、イソポは話の初めはある主人の奴隷であったのに、旅の前に重い食糧を入れた荷物を選んで持ち、日が過ぎるごとに荷が軽くなり楽をしたという話のあとに、突然、奴隷商人と行動している話になっていて、話の展開上矛盾が生じている。その箇所を『イソポのハブラス』の「イソポが生涯の物語略」の本文を引用して紹介する。

ある時イソポが主人旅をせらるるに及うで、下男げにんどもに荷物を負せらるるところに、……

……案のごとく一夜には軽うなり、ひと朝にはまた減り、さうくするほどに、のちには何をも持たいで手うち振つて、躍つ跳ねつして喜うで道があるいた。それによつて主人を始めて朋輩もイソポが分別のところをみな誉めたと申す。

それよりのちに、かのイソポに今二人を介添へてサモといふところへ行いた。その所にシヤントといふ学匠があつたが、かの商人しやんとに行きむかうて、まづ二人の能芸をたづねらるるに、兩人とも

に、「なんでもあれ存ぜぬことはない」と答へた。その時イソポかの二人の言ひやうを大きにあざけつたところで、シヤント、イソポに問はるるは……<sup>(10)</sup>

本文中の傍線部の「主人」は『イソポのハブラス』「イソポが生涯の物語略」の初めからイソポの主人として登場している人物で、自分の柿をイソポが食べたと思ひ込みイソポを責めた人物であり吐却して無実であることを認めさせた主人である。この主人がこのあと、下男たちとイソポとともに旅をするのである。ところが、そのあとの話には、この主人はもう出てこない。イソポとあと二人を連れているのは二重傍線を付した「商人」<sup>(あきし)</sup>であり、先の主人とは別人である。しかも、「かの商人」と書かれていて、それより前に既に登場している書きぶりであるが、それ以前に商人は出てこない。このように、話の展開上矛盾が生じているのである。

これは、原典にある、「主人を変えることになつた話」を省略したために生じた矛盾である。原典では次のような話がある。初めの主人の小作人頭のゼナスが面識のある奴隷商人にイソポを買えと持ち掛ける。商人は断るが、イソポが後を追ひ、自分を買うように勧め、商人がイソポの弁舌の才に動かされて買い取る。この奴隷商人が先の引用部分に出てきた「商人」である。他の下男と旅に出たときにイソポが初めは重い食料の荷物を選んで持ったが日を追うごとにどんどん軽くなった話はこの「商人」との話であり、この奴隷商人からシヤントがイソポを買いとるのである。

この部分も『伊曾保物語』では話の順序を入れ換えて、イソポがシ

ヤントの奴隷になる話を先においているので話の展開に矛盾は生じていない。『伊曾保物語』が作られる中で、原典が日本語に翻訳された時の「根本」の形からは、改編され再編集されていると考えられる<sup>(1)</sup>。したがって、話の展開上の矛盾は解消されている。

### (3)

イソポには子供がいなかったので、バビロニヤでエンノという官人の子を養子にするが、この養子は、自分が罪を犯したことがイソポに発覚するのを恐れ、謀をしてイソポを咎人だと国王に訴え、誅伐させてしまう。しかし、これは、イソポの友が誅伐したと偽り、棺桶にかくしたのであった。一旦はイソポを罰した国王がイソポの才知を惜しみ生きてくれたらと悔やんだ時、イソポの友が事実を話し、イソポは名誉を回復する。ところで、イソポが誅伐されたあと、養子のエンノはイソポの身代を継いでおり『イソポのハブラス』には「さてかのイソポが跡式をば論ずるものも無う、かの養子がこれを進退致いた。」と書かれている。しかし、罰せられ誅伐されたはずのイソポが名誉を回復した後は、養子のエンノは罪に問われるはずであるのに、『イソポのハブラス』では、その話がなく、イソポがエンノに示した教訓が「イソポ養子に教訓の條々」と一章立てて書かれているだけである。エンノが罪に問われたのか、許されたのかわからないままになっていて、話の展開上矛盾が生じているのである。

この部分は『伊曾保物語』では、養子エンノ（『伊曾保物語』では「えうぬす」）の処遇が次のようにはっきりと書かれている。

『伊曾保物語』伝記部に見られる矛盾についての考察（濱田幸子）

去程に、いそ保を召なをされける上は、かのえうぬすが罪科<sup>ざい</sup>のがれずして、かれを死罪におこなはれんとの勅定なり。然所に、いそほ支へ申けるは、「とても我をあはれみ給ふ上は、かれをも御ゆるされをかうむりたくこそ候へ。かの物に諫<sup>いざな</sup>めをなさば、悪心たちまち翻りて、忠臣となさん事疑ひなし」と奏しければ、「ともかくも」とてゆるされけり。（上巻第二〇章「多りみほ伊曾保が事を奏聞の事」）

エンノは、国王からは死罪とされたが、イソポのとりなしで許されたのである。そして、イソポが与えた諫めというのが、イソポがエンノに示した教訓の「イソポ養子に教訓の條々」である。『伊曾保物語』では、ここで上巻が終わるが、次章である中巻の第一話が「いそほ子息にいけんの條々」で、話のつながりもよく、矛盾したところも見られない。

『イソポのハブラス』では、国王がイソポの才知を惜しみ生きていくれたらと悔やむ原因となったエジプトからの不審に対してイソポが解答をしたところで、「イソポが生涯の物語略」は終わっていて、その続きの話は、章を分けて「エヂツトよりの不審の條々」「イソポ養子に教訓の條々」「ネテナボ帝王イソポに御不審の條々」の三つの話が順に置かれる形である。そのように章を分けた話を置いていく中で、養子エンノのその後の話が抜けてしまったのではないかと思われる。

### 三 『伊曾保物語』伝記部に見られる矛盾点

前章で『イソポのハブラス』伝記部に見られる矛盾点を取り上げた。それらの矛盾は話の展開上の矛盾であった。そして、『伊曾保物語』におけるそれと同じ箇所はそれぞれ、矛盾が生じないように内容を変えたり、話順を入れ換えたり、工夫されていた。

しかし、『イソポのハブラス』の矛盾とは別の箇所『伊曾保物語』にもいくつか矛盾点が見られる。『伊曾保物語』に見られる矛盾は、原典の中のいくつかの話を省いたことによる話の展開上の矛盾ではない。それでは、矛盾が生じないように工夫されたはずの『伊曾保物語』に矛盾が生じているのはどうしてであろうか。

本章では、『伊曾保物語』伝記部で矛盾が見られる章を三章取り上げ、その矛盾の特徴を見ていく。

(1) 『伊曾保物語』上巻第一八章「伊曾保養子をさだむる事」に見られる矛盾

この章はイソポがバビロウニヤの国のリクルス<sup>(12)</sup>という帝王に仕えていた時の話である。バビロウニヤの王の名は、前章の第一七章で「去程に、いそほはそれより諸国をめぐりあるきけるに、はひらうにやの国りくるすと申帝王、これを愛し給ふ事かぎりなし。」と書かれており、リクルスであることが確認できる。

矛盾が生じているのは、その地で迎えた養子エウヌスがイソポを裏切り、イソポが他国の王と心を合わせ敵となつていてと国王に語ると

ころである。その部分は「我親いそ保こそりくうるすの帝王に心を合はせ、すでに敵とまかりなり候」と書かれており、イソポが心を合わせ敵となった王の名をリクルスとしているところである。この名前は、今イソポが仕えているバビロウニヤの王の名前であり、養子のエウヌスが密告した当の相手であるから、謀反にもならず矛盾しているのである。この矛盾は翻訳時の間違いではないだろうか。「根本」にそうなつていたのだろう。この矛盾については、『イソポのハブラス』では「[Esopo conogoro yaxino cuatate tacocuye vucuri, cono cunio catanugeoio tucamatcuruto cocuvoye soxia]」と「他国へうつり、この国を傾けうとつかまつる」となっており、間違いを正している。『伊曾保物語』では訂正されることなく、古活字本作者も「リクルス」と「リクウルス」は別人と判断したのか、間違いに気付かなかつたのか、そのままになっている。<sup>(14)</sup>

(2) 『伊曾保物語』中巻第三章「ねたなを伊曾保に尋給ふ不審の事」に見られる矛盾

この章は、バビロウニヤの帝王の命で、エジプトの王の不審(疑問・難問)に解答するためにイソポがエジプトに遣わされた時の話である。イソポはエジプトのネタナヲ帝王に「けれしやの国のこまいな鳴時<sup>(15)</sup>は、当国のさうやくはらむ事あり。いかん」と問われる。これは、ギリシヤの国の馬が嘶くと当国つまりエジプトの雌馬が子を孕むのはどうしてか?ということである。また、これに対するイソポの解答は、エジプトで大切に敬われている猫を打擲し、それを何故かと問

ただされたときに「今夜このねこ、我くにの庭鳥をくひころし候程に、さてこそいましめて候へ」と言ったことである。つまり、今夜この猫が、わが国バビロウニヤの鶏を食い殺したので罰したのだということである。勿論いまソポがいるのはエジプトで、バビロウニヤはずいぶん離れており、その夜エジプトの猫がバビロウニヤにいる鶏を食べることができるとはならない。『伊曾保物語』の話もそれに続けて、エジプトの帝王が「いかでかさる事のあるべき。当国とその国とははるかにほどとをき所なれば、一夜がうちにゆかん事、いかに」と問うている。それに対して、イソポは先のエジプトから出された不審を引き合いに出しながら「けれしやの国のこまいなきける時、当国のさうやくはらむ事あり。そのごとく、当国のねこも、わが国の庭鳥をもくらひ候」と答え、それでエジプトの帝王は「げにも」と納得している。つまり、エジプトからかけられた言いがかりを、言いがかりをかけ返すことで、解答としているのである。

しかしながら、イソポはバビロウニヤから派遣されてエジプトに来ており、この問いもエジプトとバビロウニヤとの間の問題であるはずである。初めのエジプトからかけられた言いがかりの中に、この二国ではないギリシヤの馬が取り上げられているのがおかしいのである。ところが、同じ話を『イソポのハブラス』で見ると、エジプトのネテナボ王（『伊曾保物語』では「ネタナボ帝王」）の問いはこうなっている。

「グレシヤの国からあまたの雑役を曳きよせたが、バビロニヤの国に駒が嘶えは、かならずこの国の雑役が孕むことがある、その意はな

んと」<sup>(18)</sup>

また、『伊曾保物語』、『イソポのハブラス』の翻訳原典シユタインヘーベル本『イソップ』の英語訳本であるカクストン版「イソップ」の日本語訳<sup>(19)</sup>では、エジプト王の問いは次の通りである。

「ではこういう問題を解いてくれ。わしがギリシヤから取り寄せた牝馬はバビロニアの牡馬の助けで孕むが、なぜか」<sup>(20)</sup>

このように、もともとの話では、エジプト王が問うている馬はエジプトにいたのであるが、その馬はギリシヤから取り寄せたものであったということであり、『イソポのハブラス』でもそのようになっていくのである。したがって、祖本の段階では「ギリシヤから取り寄せてわが国エジプトで飼っている馬が、バビロニヤの馬が嘶くと孕むのはなぜか」という問いであったといえる。それを、『伊曾保物語』では「けれしやの国のこまいな鳴時<sup>せ</sup>は、当国のさうやくはらむ事あり。いかに」としているのである。おそらく「ギリシヤから取り寄せてわが国エジプトで飼っている馬」という表現が煩雑であると感じた『伊曾保物語』作者が「けれしや（ギリシヤ）の国のこま」と簡単にしてしまったのだろう。しかしこのためにイソポの才知が生かされていない矛盾した話の筋となってしまう。

この矛盾は、『伊曾保物語』作者にヨーロッパの地理観がなかったために生じたものと考えられる。つまり、「けれしや（ギリシヤ）」、「多しつと（エジプト）」、「はひらうにや（バビロニヤ）」がそれぞれ一つの国であり、世界地図上のどの位置にあり、それぞれの国同士がどれくらい離れているのかという知識がなかったために起きたことだ

あろう。

(3) 『伊曾保物語』 中巻第九章「伊曾保臨終におゐる鼠蛙のたとへをいひておはる事」に見られる矛盾

この章はイソポがバビロニアのリクルス王のもとを去り、ギリシヤの諸国をまわつて道を教えているうちにデルホス<sup>(21)</sup>という島に行つたときの話である。その島の人々はイソポの教えを受け入れず、イソポは濡れ衣をさせられて罪人として捕らえられ殺されてしまう。

捕らえられた時、イソポは、鼠と蛙のたとへ話（蛙を親切にもてなした鼠を蛙は川に引きずり込む。情けないと嘆く鼠も蛙も諸共にそれを見ていた鳶の餌食になつてしまつたという話。）をした後に次のように語る。

其ごとく、今伊曾保はねずみのやうにて、御辺たちによき道をしへ侍らんとすれど、御辺たちは蛙のごとくに、我をいましめ給ふなり。しかりといへども、鳶となるはひらうにやのえしつと  
の国王より、さだめて島を攻めらるべし

ところが、この部分は『イソポのハブラス』では「われこそ空しう果つるとも、バビロニアとエヂツトのひとつ、我をふかう愛せらるれば、この儀は唯は果たされまいぞ」となつてゐる。傍線部は原本で「Babiloniatu, Egyptono firobito」であり、「バビロニア」と「エジプト」が「と」で並列に繋がれていることが分かる。祖本では「バビロウニヤとエジツト」となつてゐたと想像されるが、古活字本作成の段階での誤写あるいは組版時の誤植のために「はひらうにやのえしつ

と」となつてしまつたのであろう。その後の製版本でもこの部分はそのまま、正されていない。これでは、現実にはバビロニアとエジプトがそれぞれ一つの国で離れた場所にあるのに、そうではなくエジプトがバビロニアの国内にあることになつてしまひ矛盾が生じる。これも『伊曾保物語』の作者や出版関係者に、外国（特に古代の小アジア地域）の地理的知識がなかつたために生じた矛盾と言えるだろう。

ところで、シュタインハーベル本『イソップ』の英訳本の日本語訳でも鼠と蛙の話のあとにイソップは「同様に、おまえさんたちも不当にも私を殺そうとしています、バビロニアとギリシアの人々がおまえさんたちに復讐するでしょう。」と語つてゐる。本来は「バビロニアとエヂツト」ではなく「バビロニアとギリシア」であつたようである。<sup>(22)</sup>

『イソポのハブラス』ではこの後次のように話が續く。

そののちイソポが申したにちがはず、このことがグレシヤに隠れがなかつたによつて、その国から人数を率し、デルホスへわたつてそのことを糺し、みな討ち果<sup>はた</sup>いてのけられたと申す。（「ネテナボ帝王イソポに御不審の條々」）

傍線部は原本では次のようになつてゐる。

……conocotoga Greçiani cacurega nacattani yotte, sono cunicara ninjuno soxxi ……

このように、『イソポのハブラス』ではイソポの仇討ちをしたのはギリシヤであると書かれてゐる。またシュタインハーベル本『イソップ』の英訳本の日本語訳でも、イソップが処刑されると、デルポイの



都はひどい疫病と飢饉にみまわれ、その後、ギリシャの王侯たちがイソップを不正に惨殺したことを罰するためにやってきたと書かれている。<sup>(23)</sup>このように、『イソポのハブラス』はシュタインヘーベル本『イソップ』の内容を踏襲したものと見てよいだろう。

ところが、この部分について、『伊曾保物語』では「案のごとく、西国の帝王より武士に仰て、かの島をせめられる。」となっており、「西国の帝王」として国名はぼかして語っていない。しかしながら、『伊曾保物語』の先の話では、自分を殺してもその仇討ちにバビロウニヤとエジプトの国王が攻めてくるだろうとイソポが語り、「案のごとく」と書かれているのであるから、それに従えば西国の帝王というのはバビロウニヤとエジプトの国王のことになる。イソポが殺されたデルロスというのは『伊曾保物語』の記述に、

こゝに、けれしやの国にいたり、諸人によき道ををしへければ、人々たつとみあへり。又その国のかたはら、てるほすといふ島にわたつて、我道を教けるに、その所の心、悪にきはまり、一向これを用いず……

とあるようにギリシャの傍にある島である。<sup>(24)</sup>『伊曾保物語』にはデルホスを攻めたのは「西国の帝王」と書かれているが、バビロウニヤもエジプトもデルホスの西には位置しないので、地理的に矛盾した記述ということになる。

これも、『伊曾保物語』の作者に外国の地理的知識がなかったことよって生じた矛盾（間違い）と言えるだろう。

#### 四 『伊曾保物語』伝記部の矛盾の原因

前章で取り上げた『伊曾保物語』伝記部の矛盾のうち、(2)と(3)で取り上げた矛盾の生じた原因は、『伊曾保物語』作者にヨーロッパおよび古代オリエント地域の地理的な知識がなかったためではないかと私は考える。

外国人のキリシタン宣教師は、ポルトガル、スペインから長い旅をして日本にやって来ているのであるから、ヨーロッパの地理的知識がないはずはない。また、外国人宣教師にとって『イソップ寓話』は読み慣れた書物であり、そのイソップが生きたとされる古代オリエント地域の地理を知らないはずがない。少なくとも、先に見たように、キリシタン宣教師の手になった『イソポのハブラス』にはそういった矛盾点は見られないのである。そして、『伊曾保物語』作者にそういった知識がないということは、祖本から『伊曾保物語』が作られる段階で、キリシタンの手を離れ、外国の地理的な知識の全く無い日本人によつて『伊曾保物語』は改編・再編集され今の形に作られたと言えるのではないだろうか。

(2)では、①エジプトとバビロニヤとギリシャはそれぞれ一つの国で、地理的にずいぶん離れており、馬や猫が一晚で行き来できるような距離にはないということが大前提である。そのうえで、②エジプトとバビロニヤが不審（疑問・難問）をかけあう関係にあり、③イソポはバビロニアの王に遣わされて今エジプトにいて、④イソポはエジプト王に掛けられた不審に、バビロニヤ王に代わって答えているので

ある。この大前提①を知らなかったことに加え、②のエジプトとバビロニアの関係についても、話の内容がよく理解されていなかったであろう。「けれどもの国のこまいな鳴時は、当国のさうやくはらむ事あり。いかん」というバビロニアに対する難癖にもなっていない問いに変えられて、その後もそのままになっている。『伊曾保物語』作者にヨーロッパおよび古代オリエント地域の地理的な知識がなかったため生じた矛盾であると言えるだろう。

このことは『伊曾保物語』作者が、外国から来日したキリシタンの宣教師ではなく、また、外国人宣教師からヨーロッパの地理観を学ぶ機会もない人物、つまり、キリシタンとは関係のない、外国の知識を持たない日本人であったことの証左となるのではないだろうか。

(3)でも、①エジプトとバビロニアとキリシヤはそれぞれ一つの国で、地理的にずいぶん離れており、②イソポが殺されたテルホスはギリシヤの一都市（あるいはギリシヤの傍の島）であって、③エジプトはギリシヤからは地中海を挟んで南に位置し、バビロニアはギリシヤからは遠く東に位置するという知識があれば、イソポの仇討ちに「西国の帝王」がやって来たという矛盾は生じなかったであろう。

これも『伊曾保物語』の作者に外国の知識がなかったことよって生じた矛盾と言える。そして、『伊曾保物語』作者が、外国から来日したキリシタンの宣教師ではなく、また、外国人宣教師からヨーロッパの地理観を学ぶ機会もない人物、つまり、キリシタンとは関係のない、外国の知識を持たない日本人であったことの証左となるだろう。日本はアジア大陸にそって浮かぶ島国で、外国といえはもっぱら西に

位置する唐（中国）天竺（インド）等であったことも、やってくるなら敵は西国からということになり、「西国の帝王」としたのではあるまいか。この当時のわが国の一般人は古代の西洋の国名や地理に優れているはずもなく、話を書き綴るなかでこのような矛盾が生じたのも当然と言えるかもしれない。

おわりに

『イソポのハブラス』伝記部と『伊曾保物語』伝記部の、それぞれに見られる矛盾点を取り上げ、考察してきた。『イソポのハブラス』の伝記部にも『伊曾保物語』の伝記部にも矛盾する箇所がいくつか見られるが、その矛盾している箇所は『イソポのハブラス』と『伊曾保物語』で違い、その矛盾がもつ特徴や、矛盾が生じる原因も『イソポのハブラス』と『伊曾保物語』とで異なっていた。すなわち、『イソポのハブラス』の持つ矛盾は、話の展開につじつまの合わないところがあるのに、そのままにされ、未完成であるために生じた矛盾であった。

一方、『伊曾保物語』伝記部の矛盾は、一例を除き、『伊曾保物語』作者にヨーロッパおよび古代オリエント地域の地理的な知識がなかったために生じたと考えられる。キリシタン宣教師の手になった『イソポのハブラス』には、ヨーロッパおよび古代オリエント地域の地理的な知識がなかったために生じたと考えられる矛盾点は見られない。『伊曾保物語』作者にそういった知識がないということは、祖本から

『伊曾保物語』が作られる段階で、キリシタンの手を離れ、外国の地理的な知識の全く無い日本人によって改編・再編集され今の形になったと考えられるのである。私は、先に『伊曾保物語』作者は、内容の面からも、キリシタン宣教師ではない日本人であろうと述べたが、<sup>(26)</sup>それをさらに補うものと考ええる。

注

- (1) 本論文で使用した本文は「古活字本 伊曾保物語」(国立国会図書館所蔵本影印 勉誠社 一九九四年)で、『伊曾保物語』(旧版日本古典文学大系「假名草子集」岩波書店、一九六五年 所収、底本は国立国会図書館支部東洋文庫蔵の無刊記十一行本活字本「伊曾保物語」)を参照した。本文引用の際は、必要な部分に句読点を施し、漢字に置き換えた。また、ローマ字口語体のキリシタン版のものは『天草本伊曾保物語』(新村出翻字 岩波文庫、一九三九年)で、『文禄二年耶穌会板伊曾保物語』本文オフセット版(京都大学文学部国語学国文学研究室編 京都大学国文学会発行 一九六五年)を参照し、必要な部分は原本として引用した。キリシタン版の呼び方が統一していない上に両者の名前がよく似ていて紛らわしいため、国字本を『伊曾保物語』、キリシタン版を『イソポのハブラス』で呼び分けることにした。また、『伊曾保物語』の伝記部の主人公名は「いそほ」、「イソポのハブラス」では「Esopo」と表記されているが、人物名であることと分かりやすさのために、論文中は「イソポ」と片仮名表記する。
- (2) 小堀桂一郎『イソップ寓話』講談社学術文庫、二〇〇一年(初出は中公新書、一九七八年)。
- 遠藤潤一『邦訳二種 伊曾保物語の原典的研究 正編』風間書房、一九八三年。
- 遠藤潤一『邦訳二種 伊曾保物語の原典的研究 続編』風間書房、一九八四年。

『伊曾保物語』伝記部に見られる矛盾についての考察(濱田幸子)

遠藤潤一『邦訳二種 伊曾保物語の原典的研究 総説』風間書房、一九八七年。

(3) 『伊曾保物語』がイソポという人物の一代記物語という形で再構成されていることについては、濱田幸子『伊曾保物語』の成立についての再考察(『佛教大学総合研究所紀要』第二七号、二〇二〇年三月)で考察している。

(4) この点についても注(3)の拙稿で考察している。

(5) 亀井高孝・三上次男・林健太郎・堀米庸三編『世界史年表・地図』一九九五年(吉川弘文館)による。

(6) 原本には「*cotobana domotide vogatata*」とあり「どもり」と書かれているが、論文中では「吃音」としておく。

(7) 伊東正義訳『イソップ寓話集』岩波ブックサービスセンター、一九九五年。(底本は Jacobs, Joseph, ed. *Caxton's Fables of Aesop*, New York, 1889)

(8) イソポが初め口がきけなかったことは、注(2)に挙げた遠藤潤一『邦訳二種 伊曾保物語の原典的研究 正編』所収の「イソポ伝本文」(一四八四年版 Caxton 集の「the lye of Esopo」)に「he was dombe, and coude not speke」とあって、確認することができ。

(9) 原典であるシュタインヘーベル本『イソップ』が日本語に翻訳されてきた最初の形で、おそらく国字文語体で手書き本であったと考えられるが現存しない。小堀桂一郎氏の「原・伊曾保物語」(小堀桂一郎『イソップ寓話』講談社学術文庫、二〇〇一年)、遠藤潤一氏の「古活字本祖本」(遠藤潤一『伊曾保物語第二種本の翻刻と本文研究』風間書房、一九九三年)と同じものを指す。

(10) 原本では傍線部の「主人」「商人」の出てくる部分は次のように表記されている。

Arutoqi Esopoga xujin tabino xerarruruni voyôde, guenindomoni  
.....  
Sorenijotte xujinno fajimete fobainno Esopoga funbemo tocorouo  
nina fometato nbu (次の一文字不明)

- ……Sonotooronni Xantho toyū gacuxoxga attaga. cano aqildoni yu-gimuc6 (次の二文字不明). mzzu ……
- (11) 注(3)の拙稿。
- (12) 『伊曾保物語』では「はひらうにや」と表記されている。バビロニアのこと。読みやすさのために論文中では、国名と人名は片仮名表記とし、「バビロウニヤ」と表記する。
- (13) 『伊曾保物語』では「りくるす」と表記されているが、注(12)にも書いた通り、論文中では人名は片仮名表記とする。『インポのハブラス』では「Lycero」(リセロ)となっている。
- (14) 『伊曾保物語』の中には、リクウルスがバビロウニヤではない国の王であると書かれた箇所がある。それは、中巻第五章の「学匠不審の事」の「それりくるすといふけれしやの帝王より、三十万貫を借り候所、実証明白なり。」とエジプトのネタナラ帝王に言うところである。ここではリクウルスはギリシアの王とされている。この話は、『インポのハブラス』では、「そのことわりはリセロ帝王から借らせられた三十万貫の借状であった。」と書かれているだけである。シュタインヘーベル本の英語訳本であるカクストン版「インソップ」の日本語訳にも、ネタナオ王がリクウルス王に金貨千マルクを借りていると書かれているだけであり、注(8)の「インポ伝本文」にも、「Borrowed of the kynge Lycurre a thousand marke of gold.」と書かれているだけである。古活字本『伊曾保物語』の作者は、リクウルスあるいはリクルスという名前の王がどこかの国の王であるのかを強く意識していなかったように思われる。
- (15) 『伊曾保物語』では「ねたなを」と表記されている。人名であるので論文中は「ネタナラ」と片仮名表記する。
- (16) ギリシヤのこと。
- (17) 『インポのハブラス』の原本では「Grecia」と表記されている。ギリシヤのこと。
- (18) 『インポのハブラス』の原本では次のように書かれている。

Greciano cunicara amatano zōyacuuo figiyoxetaga. Babiloniano cunini comaga ibayeba. canarazu como cunino zōyacuaga faramu cotoga

- aru: sono cocoroua nantoto touaxerareuba ……
- (19) 注(7)に同じ。
- (20) 注(8)の「インポ伝本文」には次のように書かれている。
- I have made mares to be brought to me oute of Grece, the whiche conceyuen and bere horses by the help of the horses, that ben in Babyloyme.
- (21) 『伊曾保物語』では「てるほす」と表記されている。地名であるので論文中は片仮名表記する。『インポのハブラス』では「Delhos」と表記されているので濁点を付して「デルホス」としている。
- (22) 注(8)の「インポ伝本文」に次のように書かれている。
- And semblably ye make me to deye wrongfully. But Babyloyme and Grece shalle auenge me vpon yow.
- (23) 注(8)の「インポ伝本文」に次のように書かれている。
- And when the prynces and grete lordes of Grece had tydynges how the Delphyns had put Esope to dethe, they came to Delphye for to pryussie then whiche had Inuistly and mysrably put Esope to dethe.
- (24) デルホスについては、『伊曾保物語』(旧版日本古典文学大系『假名草子集』岩波書店、一九六五年)の注には「天草版に Delphos. 古代ギリシヤの中部にあつた都市。アポロが神託を授けた所。」と書かれているが、『インポのハブラス』では「sono cunino vchina Delphostoyū xi-naye vatari.」と書かれ、『伊曾保物語』でも「てるほすといふ島にわたつて」と書かれていて矛盾する。デルホスが島であるとするれば、エーゲ海に浮かぶデロス島ではないかとも思われる。この島もアポロンの神託で有名である。シュタインヘーベル本『インソップ』の英訳本の日本語訳本では、「ギリシアで最も有名な地方デルポイ」(注(8)の「インポ伝本文」には「the lond of Delphye, whiche was the best prouince of al Grece」とある。)と書かれている。同じく『インソップ』が、デルポイの市民を海中の丸太にたとえた話をしていることから、翻訳時に、デルポイが海に浮かんでいると勘違いし、「島」と書いたと考えられなくともなさう。

(25) 亀井高孝・三上次男・林健太郎・堀米庸三編『世界史年表・地図』

一九九五年(吉川弘文館)の「増補版標準世界史地図」四頁「エーゲ文明 前十世紀前後のオリエント」各地図による。注(24)で述べたように、デルホスが古代ギリシャ中部の都市か、エーゲ海上の島かは今のところ判然としないが、バビロニヤもエジプトも、デルホスの西に位置しないことには変わりがない。

(26) 注(3)の拙稿。

(はまだ ゆきこ 佛教大学総合研究所特別研究員)